
魔法少女リリカルなのは～緋色の平穏～

下駄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜緋色の平穏〜

【Nコード】

N9430X

【作者名】

下駄

【あらすじ】

その少年は、優しい人と穏やかな日常を心から望んでいました。当たり前の毎日は、だからこそ尊い物。そう信じて静かに生きようとしていたのに、こんなはずじゃなかった出来事に巻き込まれてしまいました。

だけど彼は諦めません。わたしの親友である白い魔法少女とも違う、誰にも真似できない強さでもって、悪意に立ち向かっていったのです。

これはわたし、フェイト・テストロッサ・ハラオウンに、忘れられ

ない悲劇と、新たな勇気を与えてくれた物語。

携帯サイト「ばいっあだすと」でも同作品を連載中です。こちらは
P C 閲覧向けで連載します。

二人の時間

優しい現在いまと、絆きずなの未来を。



——起きてよ たっ君、もう朝食の準備はできてるし、そろそろ起きないと学校遅刻するよ！

——もう、たっ君また襟が立ってるよ。ちよっと動かないでね……。よしこれで良いよ。

——野菜を残しちゃだめだからね、たっ君。

——ほら、たっ君の歯ブラシに歯磨き粉付けておいたからね。

今日も隣に住んでる男の子、たっ君は中々起きてくれません。起きてもブラウスのボタンは掛け違えてるし、ほっぺにご飯粒ついてるしで、見ていると見事なまでの駄目っぷりです。

ようやく たっ君に朝ご飯を食べさせて支度して、二人一緒にマンションを出ました。

大きな欠伸をしている たっ君の横で、私は腕時計を確認します。

よし、この時間なら今日は二人して走らなくても大丈夫だね。二人でのんびり歩いて登校です。

やたらと二人を強調するのは、いわゆる一つのそういう意味。もっとも、鈍感なお隣さんはまるで気付いてはくれませんが。

でも、それで良いのかもしれませんが。だって——

——近くの廃ビルにカラスのお化けが出たんだって」

——喫茶翠屋にね、新しいケーキが増えたんだよ。放課後一緒に寄ってこうよー。

——そうだ、冷蔵の残りの食材少ないからそろそろ買い物しないと駄目だよ？

——むう、だからお母さんと言うなー！

ああ、楽しいな。

たっ君のお世話をするのも、こうやってお喋りしながら一緒へ学校に行くのも、学校帰りに二人で寄り道するのも、全部楽しい。
大切な友達と二人だけの時間。

こんな楽しい毎日が、いつまでもいつまでも続けばいいのに。

第一話 リアル弾幕シューティング体験コーナー

はじまりはじまり。



平穩という言葉を辞書で調べてみると、“変わったこともなく、穏やかであること”と記されている。つまりそれが平穩の定義というわけだ。

平穩を素敵なこと退屈なものと考えるのは人それぞれであろうが、この俺あかつきたくま眺拓馬は、平穩をとっても重要視して生きている。

いくらビルゲイツクラスの世界的億万長者だって、その金を使う暇が無ければそもそも金持ちである意味はないだろう。

俺は眠る暇さえ惜しみ働き続けて大富豪になるより、多少貧乏でも自由でゆとりある生活を送ることに意義を感じる人間だ。

この前学校で書かされた進路希望の将来のなりたい職業にも、“しがないサラリーマン”と書いておいた。次の日、担任の先生に呼び出しくらいもつと将来に夢を持てと説教されたのも、今となっては懐かしい想い出だ。昨日のイベントだけど。

しかし、呼び出しくらったのが昨日で良かった。右手で胸に抱くように持っている袋の中身のことを考えると、つくづくそう思う。

平穩に欠かせないもの、それはささやかな趣味だ。ささやかな趣味はささやかな幸福を与えてくれる。これは疑う余地のない、厳然たる事実だ。

俺にとってのささやかな趣味は、可愛い女の子といやんばちゃんなことを繰り広げる、という素敵物語が詰まっている夢のディスクを買い漁ることだ。

ちなみに俺の年齢だと法に抵触するから、皆はくれぐれも真似しないように。皆って誰だろう？

今持っている一本はついさっき買ったもので、現在は私服で帰宅途中だ。

制服はゲームを買いに行くときに経由する駅のトイレで鞆に押し込み、今の服とチェンジした。ゲームやマンガの購入のために私服を常に鞆に入れてる馬鹿野郎は、自分だけという自信と確信くらいはある。ただし改善するつもりは皆無だから意味はない。

今夜はグレートでファンタジーな世界を、ラブリーな平面世界のおにゃのこ達と冒険して、フラグ立てに勤しむとしよう。

異世界。

探検。

冒険。

全てフィクションだからこそ良いんだ。

リアルに異世界へと召喚。そこへ君が伝説の勇者だどこかの国王様に告げられ、世界を救いに可愛いお供の女の子と冒険の旅に出發……なんて、とてもじゃないけど許容できない。

誘拐で、ともすれば強制労働という所は前提条件として目を瞑ろう。

今までの現代基準の生活様式は一変して、不自由だらけの新生活。必死に化け物達と殺しあって、どこかで命を落とすかわからないよな、不安定極まりない状態になるだろう。

さらに最も重要なのは、女の子と本当にねんごろになれるかなんて保証はどこにもない。

冒険の途中にイケメンで強い戦士がパーティーに加わって、俺馬車で空気なんて展開になった日には、目も当てられないじゃないか。こんな状況で何をどう楽しめというんだ！ やっぱり、ありとあらゆる意味で荒唐無稽は二次元に限るね！

「……だというのに、さっきから俺は何故妖怪鴉に追い掛け回されてるんだ？」

「クカァー！」

近くで鳴くなよ。現実逃避の邪魔になるだろうが。

これはあれか？ 懐が寂しいという理由から、貴重な女友達のお小野宮円と喫茶翠屋行く約束を破棄した挙句、その足で同人ショップに行ってたまたま本日発売のゲームを衝動買い。結果翠屋より遥かに金使っちゃったことへの天罰か？

ちなみに翠屋とは、俺の行き着けのお店である。平穩に暮らすための重要なファクターの一つと断言しても良いくらいだ。週三回は通っているので、店の人にも完全に覚えられている。

店や店員さん達の雰囲気も心地良いし、ケーキもコーヒーも逸品揃い。たまに一緒に入る友達円を恋人と思ひ込み茶化してくる意外は、ほぼパーフェクトな喫茶店だ。

特に、時々お店を手伝っている店長の子供の栗色の髪したツインテール小学生なんて、あまりの可愛らしさに感動すら覚えた程である。

いつそ店長さんをお義父さんと呼んでもいいですか？

いやいやいやいやいや、そんな現実逃避してる状況じゃあないんだよ。

じゃあどんな状況なのかと三行で説明すると、

早くゲームしたくて近道で廃ビルに突入。

何故か鴉が襲ってきた。

死亡フラグ？

と言うわけで、要するに大ピンチというわけだ。

鴉が口から出してきた弾に被弾したため、肩と右足から血が滲んでマジ痛いんですけど。そもそも鴉って、飛び道具デフォで装備してるような不思議生命体だったっけ？ しかも一度に複数飛んでくるから避け辛い。むしろいたいけな少年には、そんなもの避けれる道理はないだろう。

「クカァー！」

サービス精神に定評のある鴉がさらに弾を追加してきたよ。こっちも叫び声に反応し、方向転換して階段を駆け上がる。それでも避けきれず、弾がいくつか身体を掠めた。

「痛っ！」

イタイイタイ。

俺は当たり判定小さい巫女でも、弾幕はパワーがモットーの魔女でもないんだよ！　というか弾を撃つんならせめて擬人化しやがれ妖怪鴉！　あ、できれば黒髪つるぺたでお願いします。

そんな妄想してたためか、階段上ってから数メートルにて壁際に追い詰められた。

はあ、ここで俺の妄想妖怪鴉たんなら「えへへ、今度はお兄ちゃんが鬼だよっ！」と微笑むのだけだなー。現実には、

「クカカカー！」

てな感じで俺と一定の距離開けてバサバサ羽ばたきながら、勝利の雄たけびらしきものを上げている。

助けて、円ママン。あの子は家事と駄目男を甘やかすのが趣味な、それこそ一般的な身体能力しか持たない普通の少女だから、実際に来られたら確実に状況が悪化するのでむしろ困るんだけどね。

あれだ、どうしようもなくなったら母親にすがりたくなるのと同じ心理だ。リアルママはずっと昔にお星様となっており、顔も憶えてないから、ここはそれと最も近い人間をイメージしてみたわけ。

一通り叫んで満足したのか妖怪鴉たんはまた発砲してきた。とっさに腕で頭を庇うが、弾はわき腹をまた掠める。

また、だ。

さつきからこの妖怪鴉たんは、どこを撃つにしても直撃コースを狙ってこない。たぶん妖怪鴉たんが本気ならとくに俺は蜂の巣にされていることだろう。

まるで人間のようにサディスティックな嗜好だな。お、ここで妖怪鴉たん中の人説浮上しました。

ああでも今ので俺の妖怪鴉たんが、つるぺた幼女からグラマラスでDSなおねー様に！　それはそれでありだな。

「ぐうっ！」

今度は腿に命中するが、やはり掠めただけ。命には関わらないだろうけど痛いものは痛いんだよ。

俺の苦悶の声を聞いてまた妖怪鴉おねー様が叫ぶ。このままだと嫌な悪循環になりそうだなあ。こうなったら、かなりかつこ悪いけどしょうがない、やるか。

「た、助けてえええ！」

絹は裂けそうにないが、全力の叫び声。発したのはもちろん俺だ。ドSな妖怪鴉おねー様は、ついに弱音という悲鳴を吐いた俺に歓喜して長い長い雄叫びをあげる。そしてさらなる悲鳴を求めて次の弾を――

「大丈夫ですか!？」

だがしかし、その弾は突然割って入った二人の少女によって、俺に届くことは無かった。

全力の叫び声。聞く者によっては命乞いとなり、また違う者によつては、SOSの救援信号にもなる。

突如俺の前に現れたのは、ツインテールの美少女が二人だった。

片方は栗色の髪に白いリボンをつけている。白と青が基調で、胸の赤いリボンが特徴的な服装。どこことなく学校の制服を連想させ、清涼感を感じる。それにしても翠屋のあの子供に似てるなあ、とそこは現実逃避しておくことにした。

もう一名は金髪に黒いリボンで赤い瞳。キッチリした印象の強い白とは対比的に、露出の目立つ黒い服だ。服と同じく黒いマントを羽織ってはいえるものの、袖が無い。下は赤いベルトをクロスさせていて、淡いピンクのミニスカートを履いている。けしからん。中身と一緒に持ち帰っていいですか？

「なのは。わたしはこの人を安全な所に」

「わかったよ。でも敵がこれだけとは限らないから気を付けてね、フェイトちゃん」

「うん、なのはも気を付けて」

二人は手短に自分達の行動を決め、フェイトちゃんと呼ばれた少

女は俺の方に向き直り手をとった。

「こっちですわたしについてきてください」

そう言うやいなや、フェイトちゃんは走り出す。無力なる少年は、共に続いて走り出すしか選択肢はなかった。

「カアアア！」

せっかく捕らえた獲物を逃すまいと鴉も追撃をかけてくるが、なのはちゃんが前方に手をかざすと桜色で円形のシールドが発生して、弾丸を正面から受け止める。

パニックホラーが急にSFへ変化し始めたよ！

それに合わせて、自分の立場が怪物から逃げまどう主人公から一転し、スーパーヒロインによって救出されたモブキャラに変更された気がする。

そっちのが良いんだけどね。主人公よりモブキャラの方が平穩に近いし。

「あなたの相手はわたしだよ！」

鴉おねー様の弾丸を全て防ぎきったなのはちゃんは、魔法少女が持つには少々ハイレクそうに見える杖を構え直し、そう言い放った。



なのはちゃんと別れて数分後。現在俺はフェイトちゃんに両脇を持たれた状態で、ビルの中を空輸されている。

逃げだした初めこそ、己に生える二本の足で懸命に走っていたが、俺の怪我に気付いたフェイトちゃんが俺ごと抱えて運ぶことを進言してくれたのだ。

なんというお気遣いの少女。まさに魔女の宅急便だ！……なんて事を考えたバカヤロウとは大違いである。で、実際走るよりこっちのが速いから大人しく輸送されている。

ちなみに、例のゲームは俺が胸の位置に抱えている。本人とは違って無傷だ。

「このままビルを脱出して、空間転移で私達の母艦のアースラという所にあなたを送り届けます」

「くーかんでんい？ あーすら？ つか母艦！？」

一般人相手に難解な専門用語出されても、ちよつと反応に困る。下手に対応したくもないし。

「すみません！ それは、えーとですね」

すぐに自分の失敗に気づいたようだが、言葉に詰まっているところを見ると説明の仕方に困っているらしい。今の段階ですでに世界観違い過ぎるし、何よりこんなSFチックに空輸している状態じゃ説明のしようがないと言った方が正しいだろう。

それより、ちよつとうっかり屋さんなどころもまた可愛いらしいなあ。

「ああ、無理に説明しなくてもいいよ。こんな状況だし、今は少しでも早く非難するのが一番重要だと思うから。これ以上君達の邪魔にならないためにもね」

俺は視線を前方からフェイトちゃんに移し、そうフォローした。

自虐交じりの我ながら微妙なフォローだけど。

「大丈夫ですよ。これがわたし達の仕事ですから」

むむう、逆に俺がフェイトちゃんにフォローされてしまった。駄目な年上のお兄さんもいいところだ。

「何にせよ、運良く君達が来てくれなかったら今頃どうなってたか。ホントにありがとう」

「どういたしました。あの……」

「暁拓馬だよ。拓馬でいいから」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。えと、拓馬さん」

「うん。よろしくね、フェイトちゃん」

今更なお礼と自己紹介をして視線をフェイトちゃんに向けると、彼女は俺にとって初めての笑顔を返してくれた。

なんだか精神年齢俺より上じゃないのかと真剣に考えてしまいそうな少女だけど、笑顔は年相応な無垢な愛らしさを感じる。可愛い、

超可愛い。

今までも大して焦りや動揺を見せていない俺の異様に頑丈な精神は、少女の笑顔一つで現在の危険を無視してお花畑になっていた。頑丈じゃなくて異常なだけだな。

まあそんなことはどうでもいい。今はどうやってこの愛くるしい少女の携帯番号とメールアドレスを聞き出すかだ。

《ビルの外から多数の魔力反応を感知しました》

愛に餓えた狼と化していた俺の耳に、突然外国語で男の低い声が入ってきた。声の出所は――フェイトちゃんの所持する黒い斧。なのはちゃんの使っていたものより、更に武骨じゃなからうか。魔法少女の杖とはやはり思い難いものがある。

そして、男の声に呼応するかのうように壁が砕け、もう見慣れた無数の弾丸が襲ってきた。まだまだ平穏からは遠いらしい。

「危ない！」

そう叫んだフェイトちゃんに投げられ、俺は無防備なまま床に身体を打ち付けた。ゲームを、とにかくゲームを死守せねば。

「痛い、フェイトちゃん？」

多少痛む身体を起すと、すぐ目の前に真剣な表情のフェイトちゃんが立っていた。

前面にシールドを展開しているが、とても無事とはいえない。とっさに俺を庇うことを優先したため、防ぎきれなかったダメージの証が身体のあちこちに見てとれるからだ。

しかもフェイトちゃんの目線の先にはさっきと同じ鴉が五匹になって、ビルの外で横並びに羽ばたいている。なんだか複数形になると、たんとかおねー様とかつきたくなくなるのはどういう心理だろうか？

「拓馬さん。わたしは大丈夫ですから、急いでどこかに隠れてください！」

フェイトちゃんはそう言い残すと、飛翔して外の鴉達に向かって行った。

その姿を見た俺は、フェイトちゃんの言葉通りに駆け出す。このままここにも今みたいに足手まといになるだけだし、それどころか、下手に動き回ると別の鴉に襲われる可能性もある。ならば二人が鴉を退治するのを、どこかに隠れて待っているしかない。

幸い、この廃れた場所に隠れそうな場所は無数にある。この階以外の、そこらにある部屋の片隅なり、女子トイレなりに籠るのが手っ取り早いだろう。

あれだよ？ あえて隠れる場所が女子トイレなのは、俺が男だからと言う意外性とフェイトちゃん達が後で探しやすくなるための選択であって、決していやらしい意味では……。

「カアアア！」

階段を下りながらも、俺の独り言い訳絶賛稼働中な脳内に、本日幾度目か分からない鳥類の声が響いた。またかよ！ そりゃこうも襲われまくればカンストしたくもなるさ。どういうエンカウント率だよ、俺が持っているのは『ドラクエ3』の黄金の爪じゃなくてエロゲーだぞ。

声は後方から。もう振り向く必要も感じやしないので、そのまま走る。だが今度の鴉は容易く俺を追いつき、目の前に現れ威嚇するようにいないた。

壁をぶち抜いたことといい、今のスピードといい、予想通りさっきまではいたぶる為に遊んでいたかよくわかる。

「よく頑張った方だけど、ここまでだよ」

逆走しようかハンズアップしようか悩んでた俺へと答えをくれるように、新たな人間もとい、どう考えても犯人が現れてくれたのはきつと僥倖に違いない。と、ハンズアップしながら俺は考えるのだった。

第二話 強奪の凶弾

「おーとーこーかーよー」

「はあ？」

そして、俺は少なからず、いやかなりの勢いで声の主により落胆させられる。俺のあんまりな反応に、階段の上にいる男はわけがわからないといった反応を返した。

見てくれは中学生くらいのメガネ少年だ。とりわけてイケメンでもない。

文化祭の出し物の話し合いなんかで教壇に立ってもクラスをまとめられず、そこで怒鳴っても皆にシカトされそうな地味な弱腰ヒステリック系委員長キャラ。それが俺の第一印象で、きつと最後までこの印象だろうな、こいつは。

俺はこんな奴に萌えながら追い掛け回されてたのか。結構ショックだよ、特に萌えたのが。萌えたのが！ 大事なことなので二回言いました。

いや待て、ここは絶望しきらずもう一度脳内変換だ。地味な印象の委員長っぽい女の子……性転換は神の御技だね！

「君、今の状況が分かってるのか？」

人がこの精神的打撃をどうにか耐え抜こうと必死に思案していたら、メガネが二つの意味を持った上から目線で話しかけてきた。

「わかってるから手を上げてるんじゃないか」

まったく憤慨ものだよ！ といった感じで返事したら、メガネに舌打ちされた。むしろメガネの方が機嫌を損ねたようだ。

「まあいい、僕についてこい。下手に抵抗したらどうなるかなんて、言わなくていいよね」

そう途中で話を区切り、メガネは鴉の方に視線を向ける。その表情が初めよりも明らかに厳しくなっていて、言葉も刺々しさが増してきた。ご機嫌が右斜め四十五度辺りに傾いているらしい。

「へーい」

俺のあまりにやる気無い応答でメガネ君はさらに不機嫌模様が濃くしながらも、振って返り歩きだした。これ以上喧嘩を売るとほんとに撃たれかねないので、俺も上げた手を下ろし黙って後を着いていく。

道中会話も無いまま階段を上がり、そこから一番近くの部屋に通された。流石廃ビル、鍵も無ければ中身も埃くらいしかない。閑散とした広さを感じる部屋だ。

十メートル位の距離で、メガネが俺と向き合う。さっきの鴉は羽ばたいて、俺の横で身長より少し高めの高度を保っている。今更だけど、鴉ってこんなにホバリング性能良かったっけ。今度円に聞いてみよう。

メガネは部屋に入って早々、鴉の羽らしきものを取り出して何かを唱え始める。すると一瞬だけ羽を中心に小さな魔法陣が現れ鈍く黒色に輝き、瞬時に鴉へと変化した。生命の神秘とでも言うっておけばいいのだろうか？

新たな鴉はその場で一鳴きしてから、部屋を出て行く。今の状況から考えるに、大方フェイトちゃん達を呼び出してここまで道案内でもさせる気なのだろう。

俺の方と言うと、袋からゲームを取り出して傷の確認に勤しんでいる。こいつは俺の必死の防衛によって、弾丸によるダメージを一度も受けてないはず。それでもさっき床に叩きつけられたこともあるので、念のためのチェックをしようと思ったのだ。

「何やってるんだ？」

メガネが少しは空気読めと言わんばかりに声をかけてきた。

しかし、俺にとってはまず場の空気よりもゲームの安否が優先だ。よって視線も合わせずおざなりに「持ち物の安否確認」とだけ返して、ゲームのチェックを続行する。

うむ、落っことした程度だし特にパッケージには問題はない。中身も開けはしてないが大丈夫だろう。

なんてたって、開けるのはお家に帰ってからの楽しみだからな！
「君は本当に自分の立場が分かっているのか！？」

「人質だろ？」

メガネがキレそうになってきたので、ゲームを袋に戻しながら彼に視線を向ける。やれやれ我慢の効かない若者だよ。

「そうだよ、君は僕に命を握られているんだ」

「あいにく、街で連続殺人が起きてようが夜に人氣がない所うろつく様な、危機感が薄い性格でね。一物でも握られていれば、貞操の危機から泣き叫ぶところだけだ」

無論恐怖するのは、やらないか的な意味でだ。

ゲームの袋を右手に持ち直しながらの毒を吐く俺に、メガネは珍しく余裕の表情を見せる。

「ふん、その余裕も今のうちだ。すぐに泣き叫んで僕に命乞いを始めるさ。さあ寄席餌に釣られて獲物が来たよ！」

「大物釣り上げて逆に食べられるシーンですね。わかります」

先程出て行った鴉が部屋に戻ってきた。メガネの言葉通りに、二人の少女を引き連れて。

「拓馬さん！」

「あなたが鴉達を操っていた犯人ですか！」

それが部屋に入ってきた、フェイトちゃんとなのはちゃんのそれぞれの第一声だった。

「やあ君達。その通り、僕が鴉達のマスター。漆黑なるハンターの操り手、野矢正樹だ」
のやまさき

うわーい、リアル厨二病くさーい。メガネはようやくくまともに上から目線で会話ができる人間がやってきて、内心かなり喜んでいるようだ。今名を名乗ってた気がするけど、もうあいつの呼称はメガネから上書き不可能になっている。

「すぐに拓馬さんを開放してください！」

「するわけが無いだろう？ 彼は人質なんだからね！」

メガネがフェイトちゃんの言葉を、心底見呆れたような抑揚たっ

ぶりな声で否定した。そのままノリノリなメガネは新たな羽を三枚取り出して、鴉の数を五匹に増やす。

それを見た二人は驚きながら警戒を強め、メガネは厭らしく口元を歪める。

やっぱり俺との会話より活き活きしてるなあ。俺とお喋りはそこまでストレス溜まりましたか。なんだか沸かなくていい罪悪感が沸いてきたよ。嘘だけど。

「なんでこんな事したんですか！」

なのはちゃんが杖を構えながらメガネに詰問する。メガネはやれやれと首を振り、返答より先に命令を提示した。

「その質問に答える前に、まずはその危ない武器を置いてもらおうか。もちろん、少しでも変な事をすればあいつの命は無いよ」

「武器を置けば、その人を解放してもらえますか？」

「うるさいな、早くしろよ！ どうせ君達に選択肢なんて無いんだからなあ！ やれ」

なのはちゃんの言葉をほとんど無視して、俺の横にいるカラスが戦慄き弾丸を連射する。そいつは容赦なく目標を撃ち抜いた。そう、俺の………大切なゲームを。

袋は取っ手から引きちぎれ、本体も雨のように降り注ぐ弾丸により数秒と待たず粉々になった。俺はただ呆然と、今さっきまでゲームだったものの残骸を見つめるのみ。

「さっさとしないと、次はあいつ自身があなるよ」

必死に守ってきたものが脆くも崩壊した。自分の身体を盾にまでして護ってきたというのに、俺はなんて無力なんだ。

「なのは、ここは言うことを聞こう」

「……わかりました。武器を置きます。だから拓馬さんには手を出さないで」

「そうそう、それで良いんだよ」

運良く偶然に見つけた、初回限定版だったのに。

「じゃあ次はその服を脱いでもらおうか。バリア以外にもその変な

服が、僕のダーククロウの攻撃から身を守っていたのは分かってるんだ」

明日また買いに行ったとしても、店に置いてあるのは通常版だけだろう。

「早くしたまえ。人質がどうなっているのかい？」

出会った時の、あの感動。

手に取った時の、あの期待。

レジに持っていた時の、あの衝動。

そして残骸を見つめる、この絶望。

絶対に、許さない。

「おい、下種野郎」

気が付けばそう口を開いていた。お遊びはこれまでだぞメガネ。彼女達が現場に現れたことはすぐに“相棒”が教えてくれたが、できるだけすぐ平穩に戻るよう、限界までその力を借りないようにここまで逃げていた。

助けてもらった後は、彼女達の実力とこの状況を如何にして乗り切るかを観るためと、一般人であり続けるため今まで大人しく流れに身を任せて傍観。

だがここで行動方針を少々修正する。

どうせここで俺が人質に徹したとしても、彼女達は隙についてバインド魔法でメガネを捕獲することだろう。しかしそれではこの怒りは収まらない。

あいつはやってはいけないことをやった。それを教えてやれねばならないのだ。

平穩へは確実に戻るが、あいつの崩壊のきっかけは俺自身が作らないと、俺のアイデンティティが許可しない。

「なんだ？ お前もいい加減口の利き方に気をつけろよ！」

メガネの言葉は無視して、俺は無言でポケットから折りたたみ式のナイフを取り出した。

俺の抵抗と自分の武器を比較し、メガネは下卑た笑いを貼り付け

る。

「おいおい、そんな玩具で僕の鴉達に勝てると思ってるの？」

「下手に抵抗するのは危険です！　ここは私達に任せてください」

フェイトちゃんが俺をこれ以上傷つけさせないために叫ぶ。けどそれは無意味だ。鴉に襲われてからここまで、この状況を本気でヤバイと思ったことは一度も無いのだから。無論、今もな。

だから俺は、確信を持ち行動する。

「お前には俺の平穩の礎になってもらうよ」

ナイフを展開し、いつもやるようにそのナイフで標的を切り裂いた。標的はさっきまでゲームを持っていた、自分の手首だ。切り裂かれた手首からは鋭い痛みが走りぬけ、どくどくと脈に乗り血が流れ出す。

「はあ！？　馬鹿かお前？　それとも撃たれるのが怖くなったか」

メガネは理解できないとただただ嘲笑するのみ。油断しきった雑魚の笑い方だ。

フェイトちゃん達も俺の意図が分からずに啞然としている。

「馬鹿は、状況の理解ができていないお前だよ」

「なんだと？」

メガネの表情は一転して怒ったような驚いたようなものになる。

人質の一言で喜怒哀楽がころころと変わるとは、凡夫以下の小物め。

「自分で自分を傷つける人間に、人質の価値があるのか？」

「ぬな！　……お前まさかそのために！？」

メガネの喜怒哀楽がまた変わる。どこまでも間抜けに、次は完全な狼狽だった。

人質は無事だからこそ、人質としての価値がある。己の要求を通すため多少傷つけることはあっても、間違って死ねばそれで終わりで。このまま放っておけば勝手に死ぬかもしれない奴に、人質としての価値なんてあるわけがない。

「さあ、君達もどうする？　俺が死ぬのを待つかい？」

ありゃりゃ、彼女達まで俺のアクションが理解できないようで、

呆気にとられている。展開が急過ぎたか。ならしうがない、もう一押しだ。

「これで足りないというなら、次は此処かな？」

そう言って俺は、ナイフを首に当てた。今度は切り裂くのではなく力を入れて押し付けるように。

ナイフと首の間から血が滲み始めた時、少女達が弾かれた様に杖を拾い上げ動き出した。

第三話 怨嗟の結末

高町なのは。

中・遠距離の射撃戦を得意とする後衛タイプのA A Aランク魔導師。後衛といっても単独戦闘をこなせる程、極めて高い戦闘力を有しており、そこいらの魔導師など物の数ではない。堅牢な装甲を誇り、魔法少女と言うよりはむしろ魔砲少女と呼んだ方がしっくりする砲撃魔法を有する。

フェイト・テストアロツサ・ハラオウン。

近から中距離の高速戦を得意とする前衛タイプのA A Aランク魔導師。高速戦といっても射撃も平均以上に行える言わば万能型だ。スピードのために装甲を殺してはいるが、そもそも直撃させること自体が困難を極める。

そんな幼きながら超エリート二人が、弱者をいたぶることしかできない厨二病患者の餓鬼に負けるわけ理由があるなら教えて欲しい。実際、決着までは五分とかからなかった。

「ハーケンフォーム！」

フェイトちゃんの斧、もといデバイスであるバルディッシュ。そのバルディッシュに付いているリボルバーからカートリッジが一発使用され、魔力刃が展開した。

フェイトちゃんの自身の姿もマントやスカートが消えて、さらに軽装となっている。高速戦型魔導師がさらにスピードを追求した形態で、俺のところへ瞬時にすっ飛んできた。

メガネは、少女達が杖を回収して動き出してから、ようやく自分がかかり追い詰められていることを把握したらしい。

それでは遅すぎる。このレベルで実践経験豊富な戦闘魔導師相手に、冷静な対応などできる道理があるものか。

我がゲームの憎き仇である鴉はあっけなく金色の刃に叩き伏せられ、ピクリとも動かなくなり羽へと還元された。

鴉を倒したことを確認したファイトちゃんは、すぐさま自分の黒いリボンを片方だけ解いて、俺自身が切り裂いた手首より少し下にきつく巻きつける。

血の勢いが確かに緩んだ。ただし、理由はリボンだけではない。止血に微力ながら“相棒”の力を行使した。

こいつはちよつとした賭けだ。ごく少量ながらも、俺から発生した魔力を悟られれば負け。かと言って、演技と迫力優先して少しばかり深く切り過ぎたので、このままってわけにもいかない。魔法はバレれば後で必ずつつかれるので、現段階で賭けの勝敗は考慮すべき事項ではないだろう。

だから、最速で平穩に帰還するため他に優先すべきは、フェイト達を丸め込むことだ。俺はさっきまでの態度が嘘の様に呆けた面と弱々しい視線を、自分の手首とフェイトちゃんの順番で合わせる。嘘なのは今の態度の方だけだ。

「もう大丈夫です！　すぐに治療ができる場所まで転送しますから」俺を励ます少女の目は力強い。だが、うっすらと涙が浮かんでいる。

俺はがくがくと身体全体を微振動させながら、崩れるように両膝を着いた。その身体をフェイトちゃんは力強く抱きしめてくれる。

この優しさがフェイトちゃんの本質なのだろう。慈愛に満ちた少女で、このペテン師には勿体無い行為だ。そう思いながらも、震える身体をフェイトちゃんへと預ける。

これで、さっきの行動が素ではなく演技だと思い込ませることは成功しただろう。なんせ、この子達の中にいる俺は、ただの一般人でなければならぬのだから。

「アクセルシューター！」

なのはちゃんの方は襲いくる鴉達の弾丸を全てバリアで防ぎ、逆に二桁を超える誘導性の魔力弾で次々に撃墜していった。一発を回避しても止むことなく次々と死角から飛んでくる桜色の魔力弾は、軽々と鴉達を蹴散らしていく。

メガネも必死に残りの羽を使用して鴉を生産するが、無駄な足掻き。ワンサイドゲームとなった戦いを、一ミリたりとも揺るがすことは叶わなかった。

全滅？ 十二羽の鴉が全滅？ 三分もたたずにか？

思わず口に出してしまいそうになった。なのはちゃん白いし、鴉黒いのでアレが思い浮かぶんだもん。白い悪魔スゲー。

「くそおおおおお！」

「逃がさないよ！」

鴉達の完全敗北を悟ったメガネは、半泣きになりながら今更出口へと走る。

そんな幼稚な行動を読んでいたなのはちゃんは、逃げるメガネの手と足を拘束魔法で拘束した。

「デイベインバスター！」

「うわああああああああ！」

なのはちゃんの杖、レイジングハートは先端を円形から槍型に変形。己が姿を基本形のアクセルモードから、砲撃形であるバスターモードとチェンジし、主砲“デイベインバスター”を発射する。

巨大な魔力の塊に襲われたメガネは、部屋の壁の隅っこまで吹き飛び壁に叩きつけられた。叩きつけられてもまだ桜色の光は止まることを知らず、メガネを痛めつけ続ける。格闘ゲームなら何十コンボになるのかな。

砲撃が終わってボロ雑巾のように床に転がって気絶したメガネに、衝撃によって舞い踊る埃が哀愁漂う負け犬トッピングを施した。

管理局魔道師の非殺傷設定は手加減ではなく安全に本気出すための手段らしい。俺からすれば、安全にという時点でそれは手加減だろうと思う。思うのだが、フェイトちゃんに抱かれたままあれを見てるとなんだか納得してしまった。

戦闘では意外に容赦ないとは聞いていたが、正直ここまでするのは。人質作戦でかなり憤りを感じていたらしいことがよく窺える。不正を嫌う少女の怒りを見た。側面攻撃には弱いようだが、しく

じると後が恐いな。

なにはともあれ、仇はとったよマイゲーム。でも最終的に、最も重傷なのって俺なんだけどね。

メガネをフルボッコして逮捕し、要救助者をあまり無事ではないが救い出した少女達は、自分達の母艦へと帰還した。

その後派手に自傷した要救助者は、治療によりあまり無事ではないから大人しくしてれば大丈夫にまで、己のランクをダウンさせる。大丈夫ですと断りを入れたが、金髪で豊かな胸のお姉さんに輸血までしてもらった。至れり尽くせりだ。

残念ながら俺にはきよに属性はないので、脳内がお花畑になってむしろ別の箇所から再出血するという展開には発展しなかったが。それよか、ちゃんと保険下りるんだろうな、これ。

てきばきと輸血を終えベッドの上に腰掛けたところで、何度見ても愛らしい二人の美少女が現れた。安堵した彼女達との挨拶もそこそこで始まるのは、なのはちゃんとフェイトちゃんによる医務室でのスーパ―お説教タイムである。

場所と相手を考えればお説教より、お医者さんごっこに興じたい。物凄く興じたい。

「どうしてあんな危険な真似なんてしたんですか!」

「すぐく、心配したんですよ」

さっそく理由を追求するなのはちゃんと、悲しそうな表情で言葉を紡ぐフェイトちゃん。かなりお冠のようだ。

だけど、お説教を迅速に終了させる手段はすでに用意してある。

途中で修正は幾度かあったにせよ、これまでもこれからも俺のシナリオからは外れない。

「二人が危険な目にあってたから。それを考えたら人質なんて」

「でも、一歩間違えたらあの傷が原因で死んでたかもしれないんですよ?」

実際に間近で傷を見た、フェイトちゃんのお言葉だ。今の会話で魔法で止血したのがバレてないことを確信した。本当はあらかじめ

安全を確保した上での行動だったが、それをこの子達は知る由もない。

「だって、俺に構わずなんて言っても君達は戦えなかっただろ？」

「それは……でも、あんな無茶をしてもいい理由にはありません！」

お説教脱出作戦の主な狙いは、“あんな無茶”な傷を直に見たフェイトちゃんだ。この子には俺を怪我させてしまったという精神的な負い目が、なのはちゃんよりも数段強い。

俺を物理的に運送してくれた少女は、自分が鴉の奇襲に対応できていれば俺を人質にとられずに済んだ、という罪悪感が根付いているからだ。その本質たる優しさ、責任感故に。

ならば人質の件を楯にとれば、フェイトちゃんはすぐ責任の矛を自分に向ける。

「元はといえば俺のヘマが原因なんだよ！　いくらこれが君達の仕事だからって」

全部言葉通りに俺のせいですと言わんばかりに声を荒げて、両手で自分の膝を叩く。そして衝撃が傷に伝わったように顔をしかめた。

二人の心配そうな表情に、「大丈夫だよ」と微妙に大丈夫じゃない表情で返す。こうすることにより、怒りより先に同情を買う。ベタな手だが、同じくらいベタな性格してる少女達には効果は抜群だ。ボールに収納できてポケットに入る怪物の、中でも地面と岩属性のヤツに水ぶっかけるくらいに有効だろう。

案の定、フェイトの言葉の刃先は、俺から彼女自身へと向けられた。

「あれは拓馬さんが悪いんじゃないやありません！　私が鴉達の奇襲にもっと早く気が付けば」

「それはフェイトちゃんが悪いわけでもないよ」

なのはちゃんの言うことは尤も。俺も初め、鴉の奇襲に気が付かなかった。

あの鴉は部分的に見れば結構高性能だ。壁を砕くパワーを持ち、連射に秀でた射撃魔法。攻撃の寸前まで攻撃を悟らせないステルス

性も備えている。何より、複数の同時行使を可能なのが大きい。

操っていたのがあのメガネだからよかったものの、その道のプロが扱うとなると笑えないレベルの暗殺スキルに化けるだろう。

年齢以上に実戦経験の豊富なフェイトちゃんが、そんなことに気付かないはずがない。それでも、自分を責めてしまうのが彼女の美德であり悪癖だ。

論点がズレて俺への怒りが一時的に薄まる。怒りといっても、元々心配が温床の優しい怒り。最終的に許すことを前提としている怒りなら、薄らいでいる間にこちらから仕掛ければいい。

「どんな理由であれ、結局はごく心配かけちゃったことに変わりは無いんだ……。ごめんね。そして、俺のために叱ってくれてありがとう。二人の気持ちは、ちゃんと伝わってるから」

なのはとフェイトの手を片方ずつ握り、謝罪とお礼を同時に行う。そのまま、なのはちゃんとフェイトちゃんを見つめ続けた。彼女達の返答をすぐに促すために。

虚を疲れた二人は一瞬だけ驚いて、すぐ怒った表情に戻そうとするも、結局は俺の目を見て溜め息をついた。

そのまま普段からしているのであろう、優しい表情へと変化する。

「わかってくれているんならそれでいいです」

「もう、あんな危険な真似は絶対しないでくださいね」

お説教の終わりを示す言葉が、二人から紡がれた。俺は真面目に力強く頷いておく。

その返事を見届けた彼女らは、納得したように部屋を出て行った。この子達はこれでいい。できれば携帯番号を入手したかったが、流石にそんな空気じゃなかったし、諦めることにした。

なのはちゃんとフェイトちゃんがドアを閉めて去っていったタイミングで、空気を読んで背景と同化してくださっていたヤンママ風なきよにうお医者様が、微笑を浮かばせながら声をかけてくる。「これ、壊れちゃってるけど現場検証しに行った人たちが回収してくれた、君の持ち物だそうよ」

そう言って、砕けたプラスチックとディスクの残骸が入った透明なビニールを俺に手渡してくれた。……透明？

砕けていても、パーツを見ればだいたいこれがどういう品かはわかるだろうし、ゲームのパッケージをぱっと見ただけでも、世間一般人的にこれの所持者はそうとう痛々しいと思われる。

しかしながらこれを男女がアレをナニするゲームとまではわからない。けれど、これらの商品には共通してあるものが付いているのだ。ビニールから見える、『十八歳未満はプレイしちゃ駄目よん』と堅苦しく書かれたシルバーの円形のシールがとても忌々しい。

さっきの大騒ぎなら、なのはちゃんとフェイトちゃんがこれを何か判別するための時間は最初から最後までなかったはずだから、そっちの心配は必要ないはず。問題は、これを俺に手渡した人だ。

「年頃のオトコノコだからこういうのに興味があるのはしょうがないと思うけど、程々にしなきゃ駄目よ？」

「……はい」

純で不純な少年にはお説教よりもこっちの方が大打撃だよ！ 肩を落とす俺を、金髪で大人のおねー様がくすくすと笑う。くそ、精神的なアドバンテージを取られた。

そろそろ明かしてもいいかと思ったけど、悔しいからお医者おねー様の本名は出さないことにする。思春期の少年を見守るような優しいげな笑みが、逆に辛い。

俺は落ち込むのもそこそこに、これからのことに思考の大部分を割く。本当に面倒なのはこれからだ。

この後確実に待っているだろう取調べ。中身はこの世界のことと、外の世界のこと。そしてフェイトちゃん達自身と彼女達が所属する組織についても、全て説明されるのは間違いない。

色々と説明されて、逆に質問されることもある。そんな気はさらさらでないが、下手に反応して全部知ってる事がバレるわけにはいかない。これ以上平穏が揺るがされないよう、この事件の情報も最低限は仕入れなければ。

さらに、家に帰ってから“あの人”へ今日起きたことに対しての報告が必要だ。きっとやたら興味を持つだろうから、自分にその火の粉が降りかからないようにしないと。これが一番難しいんだよなあ。思いっきり気が滅入るが、厄介ごとに巻き込まれるのはいつものことだし、覚悟して乗り切るしかない。

少しの間だけ、さよならばいい日常君。そしてこんにちは。しばらくよろしくね、非日常君。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9430x/>

魔法少女リリカルなのは～緋色の平穏～

2011年11月6日03時13分発行